日本家庭科教育学会
2025（令和７）年度例会

2025 年 12 月７日（日）13：30～16：00
オンライン開催

プログラム

開　会

13：30　開会の辞　　副会長　　中西　雪夫（佐賀大学）

会長挨拶　　会　長　　鈴木　明子（元広島大学）

概要説明　　理　事　　鎌田　浩子（和洋女子大学）

シンポジウム　コーディネーター　　常任理事　佐藤ゆかり（上越教育大学）

第１部

13：40

講演　　西岡加名恵氏（京都大学・教授）

14：30　指定報告１　　岸田　蘭子氏（滋賀大学・教授）

指定報告２　　尾島　恭子氏（金沢大学・教授）

（ 休　憩 ）

第２部

15：10　パネルディスカッション　　西岡加名恵氏，岸田蘭子氏，尾島恭子氏

閉　会

15：55　閉会の辞　　副会長　　中西雪夫（佐賀大学）

【シンポジウム】

AI の時代と家庭科　―家庭科教育が担う資質・能力の再考―

趣旨

本例会では子どもたちの生活におけるウェルビーイングを支える家庭科教育の今後を考えるにあたり，私たちが授業の中で，また子どもたちと関わる中で，AI やデジタル化とどのように向き合っていくかも含めて，改めて家庭科教育が担う資質・能力の育成について追究したいと思います。

そこで，京都大学の西岡加名恵先生から，先生が取り組んでおられる「『生きる』教育」プロジェクトと家庭科教育が担う使命との親和性について，お話をうかがう機会をいただきます。当該プロジェクトは，子どもたちにとって一番身近であり，心の傷に直結しやすいテーマをも授業の舞台にのせ，社会問題として捉えなおすとともに，授業の力で子どもたち相互にエンパワメントを生み出し，個のレジリエンスへつなげることをめざしています。そのような授業を家庭科で工夫できれば，AI 時代において一教科としての使命が果たせるのではないでしょうか。AI 時代における情報教育の必要性と同時に，直接身近な人やものに触れることによって自身の価値観を育むために家庭科教育が果たす役割は大きいと思われます。ご講演の後，シンポジウムを行い，シンポジストと参加者全員で，教育課程の在り方，家庭科の本質や家庭科教育が担う資質・能力を再考する機会を持ちたいと思います。

【第 1 部】13：40～15：00

〈基調講演〉13：40～14：30

自分と相手を大切にする方法を学ぶ「『生きる』教育」

講師　西岡加名恵氏（京都大学 教授）

〈指定報告〉14：30～15：00

1　子どもは何をどのように学びたいと思っているのか　岸田　蘭子氏（滋賀大学 教授）

2　家庭科で扱う生活価値　尾島　恭子氏（金沢大学 教授）

【第 2 部】15：10～15：55

〈パネルディスカッション〉

西岡加名恵氏　×　岸田蘭子氏　×　尾島恭子氏

西岡　加名恵（にしおか　かなえ）氏

京都大学大学院教育学研究科教授。専門は教育方法学（カリキュラム論，教育評価論）。文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会臨時委員などを務める。主な著書に，『教科と総合学習のカリキュラム設計』（図書文化，2016 年），『生野南小学校教育実践シリーズ（全 4 巻）』（日本標準，2022～2024 年），『子どもたちの「今」を輝かせる学校づくり』（日本標準，2024 年）など。

自分と相手を大切にする方法を学ぶ「『生きる』教育」

「『生きる』教育」とは，子どもたちが直面する「人生の困難」を解決するために必要な知識を習得し，友だちと真剣に話し合うことで安全な価値観を育むことをめざす教育である。子どもたちにとって一番身近であり，心の傷に直結しやすいテーマをも授業の舞台にのせ，社会問題として捉えなおすとともに，授業の力で子どもたち相互にエンパワメントを生み出し，個のレジリエンスへつなげることがめざされている。

「『生きる』教育」のプログラムには，虐待予防教育やライフストーリーワークの視点を取り入れた治療的教育が含まれている。その中で，子どもたちは支配にも依存にも陥らない人間関係の築き方を学んでいく。また，権利を学んで支援を求めたり受けたりする「受援力」を身につけること，自分の過去・現在・未来をつないでアイデンティティを形成すること等が取り組まれている。

本講演では，「『生きる』教育」のプログラムの概要をご紹介するとともに，その意義について検討したい。

岸田 蘭子（きしだ らんこ）氏

滋賀大学　教授
京都教育大学大学院教育学研究科修了，元京都市立高倉小学校校長，元全国小学校家庭科教育研究会副会長。専門は小学校家庭科の授業研究，教材開発，カリキュラム・マネジメントの実践研究。

子どもは何をどのように学びたいと思っているのか

社会の急激な変化の中で，学習内容はどんどん複雑で守備範囲も広がっています。そもそも学習者である子どもは何をどのように学びたいと思っているのでしょう。家庭生活の仕組みや成り立ちを実感をもって理解することはそう容易いことではありません。常に教材や学び方も工夫が必要です。AI はその共同者として，学びの可能性をどのように広げてくれるのでしょう。すべての子どもの成長につながる家庭科の学びをどのように保障してくれるのでしょう。

安心して学びに充実感を得られるための手がかりを探ってみたいと思います。

尾島 恭子（おじま きょうこ）氏

金沢大学　副学長　融合研究域 融合科学系 教授。
奈良女子大学家政学部卒業，同家政学研究科を修了。金沢大学教育学部講師，同大人間社会研究域学校教育系准教授，教授を経て現職。専門は家政学。（一社）日本家政学会家政学原論部会長を務める。

家庭科で扱う生活価値

AI やデジタル技術が私たちの生活を大きく変えつつある現代において，家庭科教育が目指す「よりよい生活」とは，単なる便利さや効率性の追求にとどまるものではない。また，それは教師が理想の生活像を一方的に押し付けるものでもない。「よりよい生活」を送るために重要なのは，生活をどのように捉え，人生をどのように過ごしたいのかという視点を持つことである。AI 時代において，生活の中で何に価値を置くのかを主体的に考える力を育むことが，家庭科教育に求められているという点を，皆で確認していきたい。